



企業編



ヘルメット潜水株式会社

国東町岩屋310番地
創業 昭和57年8月 従業員 27名

ヘルメット潜水株式会社は、代表取締役社長の伊賀正男さんの兄が国東町北

江で始めた潜水関連の機材製造会社を引き継ぎ、従業員6名で始めました。当初は、ウエットスーツの製造に特化することで、会社の業績を安定させていきました。しかし、1990年代に入ると、海外からウエットスーツが輸入されるようになり、次第に業績は下降していきました。そのような中、ウエットスーツの素材を使った新たな商品開発ができないかと考えていたところ、杵築市内のマリンショップからウエットスーツ素材のお



湯を入れる容器を発注されました。その製作がきっかけで2007年に「やわか湯たんぽ」を開発しました。マーケティング情報の専門誌「日経MJ」に売り込み、記事が掲載されたことにより注目を浴びました。その後、多くのマスコミに取り上げられ、全国から注文が殺到しました。やわか湯たんぽのヒットで、今までの作業場の広さでは足りなくなり、2009年に国東町岩屋にある旧城崎中学校の校舎に会社を移しました。十分な作業場も確保され、今では従業員も27名に増え、やわか湯たんぽは年間4万個を生産するようになりました。



現在、今まで培ってきたウエットスーツ素材を使った防水技術を活かして、季節を問わず売れる商品開発に取り組んでいます。中でも、これまで健康に貢献できる商品にこだわって開発してきたので、医療・介護の分野へ進出したいと計画しており、新たな雇用の拡大に結び付けていきたいと考えています。



認定農業者編



南 寿男さん 法子さん

安岐町西本
長年にわたり畜産業を営む

南寿男さんは、大分市内の製鉄所に勤務していましたが、いず

れは安岐町の実家に戻り農業をしたいという思いがあり、昭和62年に3人目の子どもが生まれたのを機に実家に戻ることになりました。実家は稲作の傍らで畜産をしていましたが、今後は畜産を主にやっていきたいと考え、徐々に飼育する牛の数を増やしていきました。経験を重ね育てた牛は、品評会でも高い評価を得て、高値で販売できるようになりました。しかし、牛を大きく成長させる肥育は販売するまで2年間を要し、その間のエサ代をはじめとした経費もかなりかかります。そこで、子牛を生産して販売する繁殖に転向することにしました。繁殖は、人工授精師に予約を入れて人工授精を行います。牛の体調よりも

人工授精師のスケジュールを優先することも多く、受精率もなかなか上がりず困っていました。ちょうどそのとき、奥さんの法子さんが看護師を辞め、牛の世話をするようになったので、人工授精師の資格を取ることになりました。それから、法子さんが牛の体調管理をしながら、ベストのタイミングで人工授精を行い、受精率も上がっていき、今では、100頭の牛を飼育する畜産農家になりました。



▲人工授精の様子

法子さんは、「牛は世話をすればするだけ、いろんな表情を見せてくれるので、とてもかわい



いが、子ども達は独立して家からいなくなりま



林業・水産業編



大橋浩見さん、政宏さん 藤川久義さん

武蔵町古市
33年前から兄弟で漁業を営む

大橋浩見さんは、父の三次さんが営んでいたローラゴチによるタイ漁に、高

校卒業後一緒に出るようになりました。しかし、その3年後に、三次さんが亡くなってしまいました。その時、弟の久義さん（現在の姓は藤川）は高校3年生で、卒業後に一緒に漁に出ることを約束してしま



らい、タイ漁の仕方をいろいろ模索しましたが、なかなか思うように成果を上げることができませんでした。それでも、兄弟2人で力を合わせた結果、4年後ぐらいから徐々に漁獲量が増えていきました。今では、漁に出るとお互い何を考えているか話さなくても分かるようになり、父の三次さんが一番獲れていた時の漁獲量を上回るようになりました。そして、6年前から2人の船に、浩見さんの息子の政宏さんが加わりま



た。政宏さんは、小さな頃から2人の漁をする姿に憧れ、高校を卒業したら一緒に漁に出ようと決めていました。浩見さんは、「息子は、昨年結婚して子どもも生まれ、家族ができました。そして、漁に出るようになって6年が経とうとしています。自分達の手伝いをしていただけではなく、早く自分で漁を仕切るようになってもらいたい。そして、今はタイ漁をする漁師が少なくなってきたので、しっかりと受け継いでほしい」。久義さんは、「父が早くに亡くなり、タイ漁の仕方を直接教えてもらうことができませんでした。政宏には、自分達のような苦勞をさせないよう、自分の知っている漁の知識をしっかりと伝えていきたい」と優しい眼差しで語っていました。

